

シェイクスピア劇と熊いじめ興行

中野春夫

1598 年の大斎（Lent）期間中に公演を強行した海軍大事一座のような例外はあるにしても（Chambers II 142）、ヘンズローの帳簿を参考にすると、エリザベス朝の大衆劇団は大斎と安息日の興行は原則として控えていた（あるいは控えるそぶりを見せていた）。ところが安息日の日曜日に堂々と娯楽興行が行われても、行政当局のお咎めを受ける心配がなかった不思議な空間が 16 世紀ロンドンの川向うに存在していた。ベアガーデン（the Bear Garden）、別名パリスガーデン（Paris Garden）で知られる、熊いじめ専用の娯楽施設である。

1. 熊いじめ小屋の場所

熊いじめにかんする言及は早くも 1174 年から存在するが（Lee 428）、熊いじめ興行がベアガーデンという特定の空間で定期的に行われるようになる背景には、この娯楽がある時点から国王（女王）直轄で制度化されたことがある。1484 年に熊使いのジョン・ブラウンがリチャード 3 世によって、「国王の熊（the King's bears）」を御前興行のために飼育する役職を与えられ、御前興行が行われない期間は大衆向けの興行を行うことができるという、独占的な権利がこの人物に与えられたのである（Chambers II 450）。安息日の日曜日が「熊いじめ興行の伝統的な開催日（the

traditional day for baiting)」（Chambers II 471）とされ、演劇興行とは異なり、「ベアガーデンの式典長（the Master of the Bear Garden）」が天下御免の興行を行うことができたのも、まさしく王室直轄の娯楽興行だったことに由来する。

ベアガーデンはパリスガーデン（Paris Garden）とも呼ばれていたが、その通称は E. K. チェインバーズの推定によると、当初熊いじめ興行がバンクサイド西端のランベス区域にある教区ガーデン（Parish Garden）の一角で行われていたためであった（Chambers II 458-62）。隣接する公認娼館街が 1546 年に一掃されるのとはほぼ同時期に、パリスガーデンもテムズ川南岸のサザック管区東端のクリンク監獄近くへと移転し、今日の私たちにもおなじみである、アガス・ロンドン鳥瞰図（1560 年）に描かれている見世物小屋で興行を行うようになる¹⁾。この地図には左右に（東西に）隣接する 2 つの見世物小屋が描かれ、牛の背中が見える左側（西側）の建物には「雄牛いじめ（the bolle baiting）」、右側には「熊いじめ（the Bearbayting）」と記されている。

アガス・ロンドン鳥瞰図の視覚情報は、ある時点まで、熊いじめ興行と雄牛いじめ興行がそれぞれ異なる見世物小屋で行われていた可能性を示唆している。あるいは別々の見世物小屋という情報そのものが間違っていたことも考えられるが、遅くとも 1580 年代には、熊いじめと雄牛いじめは同じ興行日に、ベアガーデンという同じ空間で行われていた。ジョン・ストウによる 1598 年の言及によると、もともと熊いじめと雄牛いじめは別々には行われておらず、その時点で存在していた 2 つの見世物小屋は、かつて使われていたものと今使われているものという、新旧 2 つのものであった。

1) アガス・ロンドン鳥瞰図は、誤解からレイフ・アガスの製作に帰せられてきた木版地図であるが、銅板印刷のブラウン＝ホーヘンベルク・ロンドン鳥瞰図とともに、現存しない原図から派生した地図と考えられている—Peter Barber, *London: A History in Maps*, London: The London Topography Society, 2012, pp. 31-33.

バンクサイドの西側に戻ると、かつての場所と新しい場所にある2つのベアガーデンがあり、そこでは熊と雄牛、その他の獣がいじめ興行のために飼育されていた。またマスティフが別々の犬小屋で、熊たちをいじめるために飼われていた。これらの熊や動物たちは、観客が安全に立ち見できるように、周囲を囲われた平土間の区画でマスティフと闘わされた。この場所の隣に、ボルデッロと呼ばれる娼館街がかつてあった。

Now to returne to the West banke, there be two Beare gardens, the olde and new places, wherein be kept Beares, Bulls, and other beastes to be bayted. As also Mastiues in several kenels, nourished to baite them. These Beares and other Beasts are there bayted in plottes of ground, scaffolded about for the Beholders to stand safe. Next on this banke was sometime the Bordello or stews.

(Stowe (1598) Vol. II 54)

チェインバーズは、アガス・ロンドン鳥観図の視覚情報が実際の地理とはかなり異なっている可能性を示唆しているが（Chambers II 461-62）、西側（左側）に描かれている「雄牛いじめ」小屋が、シェイクスピア時代の熊いじめ小屋である（Chambers II 464-65）。

熊いじめ小屋の建物を1593年から所有した人物が、海軍大臣一座の経済的な後ろ盾であり、フォーチュン座の実質的な所有者であった興行師フィリップ・ヘンズローである。ヘンズローが熊いじめ興行に関わったおかげで、ベアガーデンでの熊いじめ興行収入がフォーチュン座での演劇興行と比較して、倍以上の収益を上げていたことが分かる。ヘンズローの帳簿には含まれたメモによると、1608年のクリスマス後の3日間における熊いじめ興行の収入が「4ポンド、6ポンド、3ポンド14シリングであるのに対して、同じ期間におけるフォーチュン座の収入は平均1ポンド18シリング3ペンスにとどまっていた」（Chambers II 465）。ちなみに熊いじめの料金体系は芝居小屋と同じで、観客は入り口で1ペニー、栈敷席に上

がるにはもう1ベニーを払う必要があった（Chambers II 465）。

ヘンズローはベアガーデンの建物を所有する一方、地権者は「ベアガーデンの飼育官」であるジェイコブ・ミードという別の人物であった。このミードとヘンズローが1613年8月29日付で契約を結び、古い熊いじめ小屋を取り壊し、新たに熊いじめ興行と演劇興行のどちらにも使用できる可動式舞台のホープ座を建てることになった（Chambers II 465）。ホープ座の舞台を取り外し可能にした理由は、週6日（しばしば7日）開催する演劇興行と違い、動物相手の熊いじめ興行が基本的に週2日であったことによると思われる。ヘンズローは熊いじめ公演の隙間に演劇興行を組み入れることで、ホープ座をフル稼働し、収益を最大にすることを狙ったのである²⁾。

熊いじめ興行は演劇興行とともに、16世紀・17世紀イングランド社会に新たな娯楽を提供することになったが、1642年にピューリタン革命が勃発すると、一時的に消滅する。まずエリザベス朝演劇の象徴的存在であるグローブ座が一足先に、「1644年4月15日月曜日に、サー・マシュー・ブランドによって地面に引き倒された」（Chambers II 374）。その10年ほど後の1655年2月9日に、熊いじめ興行の主役たちであった「ゴドフリー氏の熊7頭」がサリー州の治安判事であるトマス・プライドの命令で、兵士の一団によって射殺された。ホープ座が「キャノン・ストリートのベチコート製造者であるトマス・ウォーカーによって」打ち壊されたのはさらにその1年後、1656年3月25日火曜日である（Chambers II 375）。

2. 熊いじめ興行の開催日

1570年代まで、ロンドンっ子たちの娯楽熱に対し独占的な受け皿の役

2) ローズ座やスワン座など通常の芝居小屋には「天蓋（heavens）」とそれを支える柱が備えられていたが、熊いじめ兼用のホープ座には設けられなかった—Dutton, *Shakespeare's Theatre*, p. 247.

割を果たしていたのが熊いじめであったが、1576年にロンドン北東部に前述のシアター座、1587年にすぐ隣の地所に海軍大臣一座の本拠地となるローズ座が開場すると、当然のことながら、競合相手が出現することになる。ところが熊いじめ興行には女王陛下という後ろ盾があり、1591年7月25日付で枢密院は、ロンドン市長および近隣のミドルセックス州とサリー州の治安判事に対し、熊いじめ興行と競合しないように、劇団に開催日の自粛を求めるべきことを指示している。

ロンドン市長および近隣のミドルセックス州およびサリー州の治安判事宛ての書簡。布告によって、インターロードおよび演劇の上演を安息日に行うことを再三禁じてきたにもかかわらず、我々枢密院が知らされたところによると、役者たちは安息日を冒瀆し、安息日以外の平日でもさまざまな場所で芝居を上演し、そのために女王陛下のお楽しみのために催される熊いじめその他、類似する娯楽に絶大な支障、損害を与えている。木曜日は熊いじめなど他の娯楽が慣習的に開催されてきた曜日であるため、市長及び治安判事には、今後役者たちが演劇あるいはインターロード、喜劇を日曜日と木曜日に公の場で上演することがないよう、断固たる措置を取ることを求める。上記の不都合を再び起こさないため、我々の命令が遵守されることを必ず確認されたし。

A letter to the Lord Mayor of the Cittie of London and the Justices of Middlesex and Surrey. Whereas herefore there hath ben order taken to restraine the playing of enterludes and playes on the Sabothe Daie, notwithstandinge the which (as wee are enformed) the same ys neglected to the prophanacion of this daie, and all other daies of the weeke in divers places the players doe use to recite their plaies to the greate hurte and destruction of the game of beare baytinge and lyke pastymes, which are maynteyned for her Majesty's pleasure yf occasion require. These shalbe

therefore to require you not onlie to take order hereafter that there maie no plaies, interludes or commodyes be used or publicklye made and shewed either on the Sondaie or on the Thursdaies, because on the Thursdayes those other games usually have ben allwayes accustomed and practized. Whereof see you faile not hereafter to see this our order dullie observed for the avoydinge of the inconveniences aforesaid. (Chambers IV 307)

ところがヘンズローの帳簿が示す限りで、ヘンズローの海軍大臣一座は1594年6月の劇場再開以降、安息日の休演には従う一方、木曜日の興行を断念した形跡はない³⁾。ロンドンの商業娯楽は競争原理が働く中、熊いじめ興行や成人劇団と少年劇団による演劇興行、あるいは市内で複数営業していた闘鶏場によって、多様なレパトリーを提供することになった。

一方、熊いじめ興行は少なくともジェイムズ1世の新たな王国統治が始まる1603年半ばまで、堂々と安息日にも公演を行っていた。ストウの『編年史』によると、1583年1月13日の日曜日にベアガーデンの観客席が崩落し、8名の観客が亡くなった。当然のことながら、ピューリタンたちはこの出来事を、安息日の務めをかまけて「獣の残虐さに大喜びする輩への」神からの忠告だと解した（Stowe (1631) 695）。1599年にバーゼルからの留学生トマス・ブラッターが残した記述によれば、熊いじめ興行は「毎週日曜日と水曜日」に開催されていた（「水曜日」は木曜日の間違いと思われる）。

ロンドンの熊いじめは通常、毎週日曜日と水曜日に、テムズ川の向こう

3) 劇場閉鎖期間が明けた1594年6月3日から9月上旬までの夏シーズンに、海軍大臣一座は2週だけ（6月15日―21日と7月29日―8月3日）5日間の興行を行い、それ以外の期間はすべて週6日間興行を続けた。9月2日から12月14日までの秋シーズンには、断続的に日曜日にも開業していた―Foakes, R. A., ed. *Henslow's Diary; Second Edition*. Cambridge: Cambridge University Press, 2002, pp. 21–26.

側で開催される。熊いじめ小屋は円形状であり、上の階が多く、のり敷席になっている一方、青空天井である平土間には観客席が設けられていない。この平土間の真ん中に、大きな熊が長いロープで杭に繋がれている。私たちが「熊いじめ小屋外壁の」階段を降りていき、熊いじめ小屋の背後に出てみると、そこでイングランド犬が120頭ほど、中庭にある別々の犬舎で鎖に繋がれているのを見た。

The London bearbaitings usually take place every Sunday and Wednesday, across the water. The play house is built in circular form; above are a number of seated galleries; the ground space under the open sky is unoccupied. In the midst of this a great bear is fastened to a stake by a long rope. When we came down the stairs, we went behind the play house, and saw the English dogs, of which there were about 120 chained up, each in his separate kennel, in a yard.

(Chambers II 456)

この言及が正しいのであれば、熊いじめ興行は10頭前後の熊に加えて、100頭前後のマスティフを必要とし、飼育費用だけでもかなりの負担になっていたと思われる。演劇興行の場合、台本と役者がそろえば毎日でも上演可能なのに対し、熊いじめ興行は、傷を負った熊の回復期間が必要となるため、連日の開催は困難であった。前節で触れたとおり、熊いじめ興行はかなりの観客収入を見込めたが、飼育費用や人件費などのコストがかさんでいたことが想像され、必ずしも高い収益率を見込めるビジネスではなかったように思われる。ところが、熊いじめ興行には隠れた利権、あるいは金銭に代えがたい名誉が存在していたらしい。

第1節の始めで紹介したとおり、熊いじめは王室御用達の娯楽であり、熊いじめ用の熊を飼育する係は1日当たり1シリング程度の給金を下賜されるだけでなく、「ベアガーデンの式典長」という官職まで与えられていた。エリザベス朝・スチュアート朝のイングランド社会で様々な業種に投

資をしていたフィリップ・ヘンズローが、熊いじめ興行に深く関わるようになったのは後者の肩書だったように思われる。ヘンズローは1597年と1604年に猟官運動を行ったが、いずれも失敗し、ヘンズローの夢がかなったのは、1604年の猟官運動が失敗に終わった直後である（Chambers II 451-52）。新たに式典長に就いたサー・ウィリアム・スチュアートは明らかにヘンズローの足元を見て、官職の譲渡金として450ポンドという法外な金額を吹っかけてきた。それでも、ヘンズローと女婿のエドワード・アレンはこの言い値を飲み、「熊いじめの共同式典長」として、国王陛下の直臣という地位を獲得した。

ホープ座を熊いじめと演劇興行兼用にした理由は、多大の投資を効率的に回収するためであったと推測され、実際に目論見は当たった（Dutton *Shakespeare's Theatre* 14）。ヘンズローとアレンが共同式典長に就任してから、熊いじめの定例開催日が以前の日曜日と木曜日から、「火曜日と木曜日」に変更されているが（Chambers II 375）、もしかすれば海軍大臣一座の安息日興行と同じく、日曜日の開催も視野に入れた変更であったかもしれない。

3. 熊いじめ興行の内容

熊いじめと雄牛いじめは、とくに海外使節や外国人旅行者たちの関心を惹きつけたらしく、さまざまな人物によって興行の様子が言及されている。それらの情報に基けば、実際の熊いじめ興行は、「熊いじめ」という用語や、シェイクスピア劇での言及から類推できるものとはかなり異なる娯楽を提供していた。チェインバーズの『エリザベス朝演劇』第2巻には、1544年のスペイン外交使節の言及を最初の例として、外国人による熊いじめ見物の感想がほぼ網羅的に収録されているが、これらの情報から推測すると、この娯楽では動物対決が目玉であって、必ずしも熊や雄牛の苦しむ光景が売り物ではなかった。

ベアガーデンの動物見世物は、基本的にはコロッセオの猛獣対決のようなものである。ただ動物の組み合わせは固定していて、片方は常にイングランド国内産の大型犬マスティフである一方、対戦相手は熊もしくは雄牛であった。ジェイムズ1世も猛獣対決を好んでいたようで、1603年から1610年までの期間に海外からの貴賓をもてなすため、5回にわたってロンドン塔で飼育されていたライオンを出演させ、1609年6月23日には「ライオン対巨体の獰猛な熊」という、豪華な組み合わせをホワイトホールで実現させていた（Chambers II 454; Lee 433）。ある段階から、熊いじめの興行プログラムには「目隠しされた熊（blind bear）」と人間との「楽しい（pleasant）」決闘など、猛獣対決以外の喜劇的な演目も組み込まれるようになり、明らかに演劇的な要素をもつようになった。

熊いじめに関する言及すべてに共通するのは、杭にロープでつながれた熊と雄牛が3頭から5頭のマスティフと戦ったことであり、1592年のヴェルテンベルク公爵フレデリックや1598年のドイツ人パウル・ヘンツナーの記録が示す通り、熊いじめという表現とは裏腹に熊や雄牛の方が優勢であった。1544年の最初期の言及を除き、ほぼすべての見物者が熊とマスティフの対決と並んで、雄牛と犬の対戦も組まれていたことを証言している。また、どの言及でも「宙に飛んだり」、「跳ね飛ばされたり」、時に絶命するのは決まってイングランド犬の方であり、熊や雄牛が瀕死の重傷を負った形跡はない。

別の場所に「ローズ座の隣に」、劇場の形をした建物があり、雄牛いじめや熊いじめのために使われていた。雄牛たちは杭に結び付けられ、イングランド産の大型ブルドッグから攻撃されていた。ところが犬の方も、雄牛の角や熊の牙によって大きな危険にさらされ、場合によってはその場で絶命することもあった。その場合は、怪我を負ったり、疲れ切った犬の代わりに、新たな犬がすぐさま補充されるのだった。

There is still another place, built in the form of a Theatre, which

serves for the baiting of Bulls and Bears, they are fastened behind, and then worried by great English bull-dogs, but not without great risqué to the dogs, from the horns of the one, and the teeth of the other; and it sometimes happens they are killed upon the spot; fresh ones are immediately supplied in the places of those that are wounded, or tired.⁴⁾ (Hentzner 42)

シドニー・リーが示唆するように、この娯楽が凄惨な光景を提供するとすれば、雄牛の角がマスティフに一撃を与えた時か、宙高く放り投げた時である（Lee 430）。ヴュルテンベルク公爵やヘンツナーの言及も、2組か3組の対戦が組まれていたらしい熊いじめについて語ってから、雄牛いじめについて言及しており、逆の順番で説明しているものはない。熊いじめの進行表が残されているわけではないので推定にとどまるけれども、熊いじめ興行は3部構成になっていたように思われる。第1部は2試合か3試合組まれた熊対マスティフ対決、第2部はおそらく1試合だけの雄牛対マスティフ、そして第3部は「目隠しされた熊」対人間、あるいはポニーの背中に括り付けられた猿の絶叫ショーなど「楽しい」演目である。

シェイクスピアをはじめ、エリザベス朝の劇作家たちは総じて熊いじめ興行について具体的な描写を残しておらず、言及する場合でも、ほぼ対象は熊側に焦点を合わせた熊とマスティフの対決に限られる。また各種の証言からすると、盛り上がったのはむしろ第2部の雄牛いじめや第3部のコミカルな余興だったように思われる。1484年にリチャード3世から熊使いのジョン・ブラウンに与えられた官職名は「国王の熊と猿すべての監督

4) ドイツ人のパウル・ヘンツナーは1597年から3年間、シュレジア貴族の子弟に付き添ってフランス、イングランド、イタリアを旅回り、各地の模様をラテン語旅行記 (*Itinerarium Germaniae, Galliae, Angliae, Italiae, cum Indice Locorum, Rerum atque Verborum*) で紹介し、1612年にニュルンベルクで出版した。その145年後に、ホルス・ウォルボールがラテン語版からイングランド旅行の部分を抜粋し、翻訳した版を刊行した。この引用は1757年のウォルボール英訳版に拠っている。

飼育統括官（Maister, Guyder and Ruler of all our Beres and Apes）」（Chambers II 452）であり、これは熊いじめ興行の最初期から、猿も余興の盛り上げに一役買わされていたことを示している。1544 年における最初期の熊いじめ興行への言及でも、熊いじめに続いてポニーと猿いじめの様子が紹介されている。

同じ場所に、背中に猿が括り付けられた 1 頭のポニーが連れてこられた。ポニーが犬の間で蹴り上げながら走ると、猿は絶叫し、犬たちが「？噛みついた」ポニーの耳や首にぶら下がる光景は大いに笑えた。

Into the same place they brought a pony with an ape fastened on its back, the animal kicking amongst the dogs, with the screams of the ape, beholding the curs hanging from the ears and neck of the pony, is very laughable. (Chambers II 252)

ポニーと猿の絶叫余興は他の言及でもたびたび登場しており、ドリッジ・コレクションに収録されている興行チラシでは、「目隠しされた熊への鞭打ち（whipping of the blind bear）」とともにフィナーレに演じられる花形演目であった。1584 年のルポルド・フォン・ヴェデルの言及が確かであれば、第 3 部のフィナーレは目隠し熊や猿の余興以外にも選択肢があり、花火やダンス、リングや洋ナシの大盤振る舞いなど、その時々で演目を変えていた可能性がある。もしレパートリーがある程度広がったとすれば、それは興行側がリピーターを期待していたことを示している。

4. 熊いじめ興行の象徴的な光景

杭につながれた熊（雄牛）と数頭のマスティフの対決とは、動ける範囲を制限されたスーパーヘビー級のボクサーが 4、5 人のフライ級ボクサーと戦うハンディ戦である。昔も今も変わらないのは、観客の期待が、疑い

なく熊や雄牛、スーパーヘビー級ボクサーの強烈な一撃にあったことである。そうだとすれば、マスティフは文字通り「噛ませ犬」役を演じさせられた憐れな消耗品であり、事実、熊いじめ興行者たちによって夥しい数のマスティフが飼育されていたことが分かっている。1584年のルポルド・フォン・ウェデルと1592年のヴェルテンベルク公爵、1599年のスイス人トマス・プラッターによる証言では、ベアガーデンの背後の区画で100頭（ルポルド）、120頭（ヴェルテンベルク公爵、プラッター）もの「イングランド産の犬」が1頭ずつ犬小屋で飼われているのが目撃されていた（Chambers II 454-58）。どの資料に基づき、どの時期に該当するのかは分からないけれども、シドニー・リーの推定によると、「全盛期のパリスガーデンでは、20頭の熊に比べて雄牛はわずか3頭、マスティフは70頭飼育されていた」（Lee 430）。

一方、ホリンシェッド年代記の巻頭に収録されているウィリアム・ハリソンの『イングランドの描写（*The Description of England*）』第14章によれば、エリザベス1世時代にはすでに野生の熊は絶滅していて（Harrison 324）、熊いじめに駆り出される熊は輸入もの、もしくはベアガーデンで繁殖されたものである。熊は希少価値の高い商品であり、しかも熊いじめは週2回の興行を持続的に行う商業的な娯楽であるだけに、主役の貴重な動物が絶命するまで続けるという進行は考えにくい。事実、そのような光景を目撃した証言は存在せず、熊いじめ興行とは、基本的に熊の圧倒的な攻撃力を見て楽しむ娯楽であったはずである。

典拠不明で真偽のほどは分からないけれども、シドニー・リーは「熊が死傷した場合でも、次の熊に交代して試合は続行され、時には連続して13頭もの熊が登場した」（Lee 430）と記している。ならば、熊対マスティフの勝負は、どうなれば決着がついたと見なされるのだろうか？理屈の上でいうと、熊使いたちの判断次第でどのような結末にもなりえたはずである。短時間であれば熊が圧倒的に優勢であり、実際の目撃証言が示すように、4頭か5頭のマスティフのうち何頭かが大きな傷を負った。ウィリ

アム・シェイクスピアの『ヘンリー 6 世・第 3 部』において、リチャードが父親ヨーク公の奮戦をベアガーデンの熊に例えているが、それが熊いじめの象徴的な光景であった。

リチャード 父上は敵の最も密集した陣地に向かい、
その姿は家畜の群れに躍り込むライオンのよう、
はたまた、犬たちに四方を取り囲まれた熊さながら
数頭を牙の餌食とし、悲鳴をあげさせると
残りの犬はただ遠巻きに吠えるだけだった。
父上はするように敵兵をあしらい、
敵兵は勇ましい父上から逃げて行ったのだ。
Methought he bore him in the thickest troop
As doth a lion in a herd of neat,
Or as a bear encompassed round with dogs,
Who having pinched a few and made them cry,
The rest stand all aloof, and bark at him.
So fared our father with his enemies,
So fled his enemies my warlike father.

(The Third Part of Henry the Sixth 13-19)

頑丈なあごと鋭い爪という武器を持つ熊が、取り囲んだマスティフを蹴散らす、というのが熊いじめの原風景的なイメージである。マスティフ側に観客を満足させるだけの負傷が起こったところで、熊使いは幕引きをしたと思われるが、もちろん長期戦にすることも可能であった。

熊いじめは 1 頭対 4～5 頭のハンディ戦であり、熊にだけ行動範囲の制限があるうえ、熊使いたちが新手のマスティフ参入によって勝負を長引かせれば、当然のことながら熊が劣勢に立たされる。『トロイラスとクレシダ』において、アキリーズはアガメムノンたちから掌を返したように冷た

く扱われると、自らの姿が熊いじめ最終盤の光景と重なって見えるようになる。

アキリーズ 俺の名声が杭につながれているのが見える、
俺の名誉は深い傷を負っているのだ。

I see my reputation is at stake;

My fame is shrewdly gor'd.

(*Troilus and Cressida* 3.3.223-24)

序盤は圧倒的な力を示す熊も、戦いが長丁場になれば、最後はマスティフたちの攻撃になすすべもなくなる。長期戦の場合は、熊が戦意を失ったところで終了されたと思われる。

5. 見て、賭けて、騒ぐ娯楽

「お芝居を聞く (hear a play)」というシェイクスピア劇で頻出する表現からすると、エリザベス朝演劇最大の特徴は、台詞を「聞く」ことで観客が頭の中で劇世界を作りあげることにある（中野 9-12）。それとは対照的に、動物対決を「見て」楽しむ娯楽だったのが熊いじめである。ただし、「見る」ことだけで満足できたわけではなさそうで、観客自身が熊や犬以上に発散した形跡がある。『トロイラスとクレシダ』のサーサイティーズはパリスとメネラウスの一騎打ちを目撃すると、一人二役で今日のプロレス観戦か野球観戦のような応援を始める。

サーサイティーズ 寝取られ亭主と寝取り男が決闘だ！ いけー、雄牛！ いけー、犬！ やっちまえー、パリス。やっちまえー、二股野郎！ やっちまえー、パリス。やっちまえー！ 雄牛野郎が勝ってるな、角に気を付け

るんだ！

The cuckold and the cuckold-maker are at it.
Now, bull! Now, dog! 'Loo, Paris, 'loo! Now
my double-henned sparrow! 'Loo, Paris. 'loo!
The bull has the game: 'ware hors, ho!

(*Troilus and Cressida* 5.8.1-3)

下ネタ系のヤジが飛びかうのは、今も昔も変わらない光景のかもしれない。この引用からすると、熊いじめ／雄牛いじめの観客たちは熊／雄牛応援団とマスティフ応援団に分かれて、大いに叫んだようである。おそらく賭けも行われ、観客の一部は『ウィンザーの陽気な女房たち』のスレンダーのように別人格で発散することができた―「僕は熊いじめを見ると、イングランドの誰よりも喧嘩早くなるんです（I shall as soon quarrel at it, as any man in England）」（*A Merry Wives of Windsor* 1.1.271-72）。

出版文化の只中で、熊いじめ興行はチラシでも宣伝を行っていたらしく、ダリッジ・コレクションに保存されている興行チラシは、主催者が賭けを売り物にして、観客の射幸心をおおっていたらしいことを示している。

明日の木曜日にバンクサイドの「ベアガーデン」で、エセックスの賭博師主催の大勝負が開催されます。来客の方々にはどなたとも、5頭の犬と熊1頭との勝負、あるいは杭につながれた雄牛のいじめを賭け金5ポンドで承ります。また皆さまにはより満足していただけるよう、馬と猿、目隠しされた熊の鞭打ちなど、楽しい余興も準備してございます。国王陛下万歳。

Tomorrowe beinge Thursdaie shalbe seen at the Beargardin on the banckside a great mach plaid by the gamstirs of Essex who hath challenged all comers what soeuer to plaie v dogges at the single beare forvpounds and also to wearie a bull dead at the stake

and for your better content shall haue plasant sport with the horse
and ape and whipping of the blind beare. Viuat Rex.

(Chambers II 458)

バリ島の闘鶏やタイのムエタイなど、この種の格闘系娯楽では賭けで場がさらに盛り上がるのが常であり、射幸性が熊いじめ興行の人気を支える大きな原動力だったのかもしれない。

娯楽文化という観点に立てば、16世紀イングランド社会は1570年代から対照的な2種類の娯楽を提供するようになった。地域はロンドンに限定されるが、今日のスポーツ観戦のような、見て応援する観客参加型の娯楽が生み出され、ロンドン住人はその時の気分に合わせて、芝居小屋かベアガーデンを選ぶことができるようになったのである。

6. 結び

娯楽文化という観点から興味深いのは、熊いじめ興行が動物対決の終了後にもう一つ、18世紀演劇興行の「アフター・ピース (after-piece)」によく似た、おまけの出し物を用意していたことである⁵⁾。興行側は、観客たちを凄惨な光景と賭博で満足させた後、猿の絶叫ショーや目隠し熊の鞭打ちで大爆笑させ、すっきりした気分帰宅させたのである。無断使用と表現して差し支えないと思うが、演劇興行もこの演出上のフォーマットを1580年代のある時期から採り入れ、小唄とダンスを組み入れた「ジグ」と呼ばれる猥褻な寸劇で一日の公演を締めくくることになる (Dutton (2018) 218-20; Gurr 212-14; Clegg 10-13)。

5) 18世紀の演劇興行において看板作品 (main-piece) の終演後に演じられた“after-piece”については、現時点で唯一のアンソロジーである以下のテキストを参照せよ— Mary Inchbald, ed. *A collection of farces and other after-pieces, which are acted at the Theatres Royal, Drury-Lane, Covent-Garden and Hay-Market. Printed under the authority of the managers from the prompt book.* 7 vols. London: Longman, 1809.

今日のシェイクスピア研究において熊いじめが言及されるとすれば、それは主に劇場史もしくは動物表象文化史の視点からであり、しかもきわめて断片的である。716 ページからなるリチャード・ダットン編『オクスフォード・ハンドブッカー初期近代劇場』（2009 年）において、熊いじめは 13 か所で言及されるが、いずれの言及も熊いじめ小屋と芝居小屋との均質性や相違点など、劇場史の視点からのものである。アンドレアス・フェッフェレの『ステージ、つなぎ杭、闘技場—シェイクスピアの劇場における人間と動物』（2011 年）は、そのタイトルと熊いじめの光景を描く表紙から、娯楽としての熊いじめを本格的に論じた研究に思えるが、実質的にはシェイクスピア劇における「動物」表象を扱ったものである。ヴェッフェルが熊いじめ興行を解説するさいに引用するのは、ドイツ人旅行家のルポルド・フォン・ヴェデルによる情報だけであり（Höfele 33-34）、しかもヴェデルの情報は、仕掛け花火やパンやリンゴの放り投げサービスに言及する唯一の例である点、熊いじめ興行の典型的な例ではなく、熊いじめ興行の娯楽性を一般化するには不適切である。

現時点でいえば、熊いじめ興行に特化した研究は事実上皆無である。熊いじめ興行が他の娯楽にどのような影響を及ぼしたのか、あるいは同時代の人々がこの娯楽をどう楽しんだのかは、興味深い問題であり、本格的な研究が待たれる対象である。

〔シェイクスピア劇からの引用はすべてアーデン版第 3 版による〕

〔本論文は JSPS 科研費・基盤研究 B「エリザベス朝英国史劇における民衆のイングランド王国表象」（研究代表者・中野春夫／課題番号 21K00511／研究期間 R3-R6）、JSPS 科研費・基盤研究 B『『詩聖』シェイクスピアの誕生—長い 18 世紀におけるシェイクスピア崇拜』（研究代表者・佐々木和貴／課題番号 24K00048／研究期間 R6-R9）、JSPS 科研費基盤研究 B「エリザベス朝演劇における劇作家の仕事」（研究代表者・篠崎実／課題番号 23K00612／研究期間 R5-R8）および JSPS 科研費・基盤研究 B「娯楽文化史からとらえるエリザベス朝演劇—社会変化が生み出す総合エンターテインメント」（研究代表者・篠崎実／課題番号 19H01238／研究期間 R1-R4）の助成を受けた成果である〕

引用文献

- Barber, Peter. *London: A History in Maps*, London: The London Topography Society, 2012, pp. 31–33.
- Chambers, E. K. *The Elizabethan Stage*, 4 vols. Oxford: Clarendon Press, 1923.
- Dutton, Richard, ed. *The Oxford Handbook of Early Modern Theatre*. Oxford: Oxford University Press, 2009.
- *Shakespeare's Theatre: A History*. Oxford: Wiley Blackwell, 2018.
- Gurr, Andrew. *The Shakespearean Stage 1574–1642*. Cambridge: Cambridge University Press, 2009.
- Harrison, William. *The Description of England*. Georges Edelen, ed. New York: Cornell University Press, 1968.
- Hentzner, Paul. *A journey into England. By Paul Hentzner, in the year M. D.XC.VIII*. Trans. and ed., Horace Walpole. Strawberry-Hill, 1757.
- Höfele, Andreas. *Stage, Stake, & Scaffold: Humans & Animals in Shakespeare's Theatre*. Oxford: Oxford University Press, 2011.
- Lee, Sidney. “Bearbaiting, Bullbaiting, and Cockfighting”, *Shakespeare's England: An Account of the Life & Manners of his Age*, Vol. II, Oxford: Clarendon Press, 1926.
- Stowe, John. *A Survey of London*. 1598. 2 vols. Ed. C. L. Kingsford. Oxford: The Clarendon Press, 1908.
- *Annales, or, a generall chronicle of England / Begun by John Stow. Continved and augmented with matters forraigne and domestique, ancient and moderne, vnto the end of this present yeere, 1631*. By Edmvdn Howes. London, 1631.
- 中野、春夫、『恋のメランコリー——シェイクスピア喜劇世界のシミュレーション』、研究社、2008年。